

2012年12月23日

「被爆者の声をうけつぐ映画祭 2011」報告書

日 時 2011年11月5日（土）10：00～21：00、11月6日（日）10：00～18：30
会 場 明治大学御茶ノ水地区リバティタワー1F（1011 教室）
主 催 明治大学軍縮平和研究所／被爆者の声をうけつぐ映画祭実行委員会
助 成 （財）庭野平和財団
協 賛 日本原水爆被害者団体協議会／被爆者の声をうけつぐプロジェクト50

■活動目的

日本では戦後に数多くの原爆関連の映画・映像が制作されてきた。一連の作品は世界的にも極めて貴重なものであり、日本の文化遺産とも呼べるものである。しかし、すべての作品がビデオやDVDとして保存されていないため、日本においてもそれらの作品を鑑賞する機会は限られている。私たち「被爆者の声をうけつぐ映画祭」実行委員会は、これら作品を広く一般の方々に鑑賞していただく機会として、2007年より本映画祭を開催してきた。

本映画祭が目指すものは、映像媒体を通して被爆者の声とは何かを考え受けついでいくことにある。そして、核の脅威を齎した核心が現在も厳然と存在し、私たち自身が核の時代を生きているという現実を、市民とともに深く考えていくことにある。そのため映像によるメッセージの発信を中心としつつも、映画祭という「場」において、その現実と現実の背景にあるものについて、市民相互の認識を促す内容を盛り込んだ映画祭の開催を目指している。

■研究活動の内容と方法

2011年度の映画祭は下記のプログラムで実施した。本映画祭では、各作品の上映後に作品のメッセージや背景などについて、関係者による講演を行い、被爆の実装を参加者とともに考える機会となるようなプログラムを企画している。なお、2011年度の映画祭では、特に核兵器と原子力エネルギーとの関係を強く意識したプログラムを構成し、被爆関連の映像作品に加え、福島からパネリストを招いて、「いま、フクシマは」と題するシンポジウムを開催した。

◇プログラム1（11月5日）『原爆症認定集団訴訟の記録 にんげんをかえせ』

ドキュメンタリー／2011年／約85分／カラー

撮影：磯部元樹 構成演出：有原誠治 製作：原爆症認定訴訟・記録集刊行委員会

お話：磯部元樹（撮影者）、奥田豊治（原爆症認定集団訴訟原告）、宮原哲朗（原爆症認定集団訴訟全国弁護団連絡会事務局長）、有原誠治（編集担当）

◇プログラム2（11月5日）『黒い雨』

劇映画／1989年／132分／モノクロ／監督：今村昌平

お話：増田善信（気象学者）

◇特別企画（11月5日）シンポジウム「いま、フクシマは」
パネリスト：菅野典雄（飯舘村長）、藍原寛子（フリー・ジャーナリスト）、酒井小百合（福島県郡山市立大島小学校教諭）、小林典子（福島中央テレビ報道部長）

◇プログラム3（11月6日）『24000年の方舟』
ドキュメンタリー／1986年／33分／カラー
製作：「24000年の方舟」映画製作委員会 製作：鵜久森典妙 構成・監督：高橋一郎 撮影：山添哲也

◇プログラム4（11月6日）『隠された被曝労働～日本の原発労働者～』
ドキュメンタリー／1995年／日本／24分／日本語（英語字幕）
制作・放映：イギリス・チャンネル4 原題：NUCLEAR GINZA
日本語版制作：岩佐基金
お話：樋口健二（フリー・ジャーナリスト）

◇プログラム5（11月6日）『六ヶ所村ラプソディー』
ドキュメンタリー／2006年／119分／カラー
監督：鎌仲ひとみ 製作：グループ現代
お話：鎌仲ひとみ（映像作家）

◇プログラム6（11月6日）『棄てられたヒバク～証言・被災漁船50年目の真実～』
ドキュメンタリー／2010年／57分／カラー
制作著作：南海放送 ディレクター：伊東英朗 チーフプロデューサー：大西康司 ナレーション：戒田節子 朗読：保持卓一郎
お話：伊東英朗（ディレクター）

■活動の実施経過

以下では、上映作品の関係者による講演ならびに上映作品に寄せられた来場者の声を紹介する。

プログラム1『原爆症認定集団訴訟の記録 にんげんをかえせ』

【来場者の声】

「本当にすごい『闘い』でした。もっともっと多くの人に知ってもらいたいです。」

「日本の負の遺産を広く深く浮き彫りにし、素人にも問題の全体を感じ取ることができました。多岐にわたる意図が具体的に理解できました。」

「被爆者の命をかけた闘いの言葉が胸に響いてきました。闘い続けて行政の姿勢を変えさせたことの大切さを学ぶことができました。」

「原爆症認定集団訴訟が、原告の命をかけた必死の闘いであることがリアルに伝わってくる素晴らしい作品でした。まだ弁護士の卵ですが、原爆症認定集団訴訟のような国のあり方、社会のあり方を問う、公益的な訴訟にかかわっていきたくと改めて強く感じました。」

「広島、長崎の経験を持つ日本が非核運動の先端に立つべきであったと感じました。福島原発事故を防ぐことができたのに、と悔やまれます。平和利用の言葉に乘せられてしまったことが残念です。」

「私は運動などにはあまり関心のない人間です。今回の映画では、おじいちゃん、おばあちゃんたちの頑張る姿と、国、厚労省の酷さを知りました。」

「実際に原爆訴訟の活動をする人たちの姿を見て、自分との距離が近づいた気がします。今まで私にとって街で声を上げて活動する人たちは、何か恐ろしい集団に見えたり、その人たちの怒りの理由や対象を考えるまでには考えが至らなかつたりしていました。しかし、自分の身に置き替えて考えたときに、近くにいる大切な人たちが国の責任の大きくかかわる出来事で奪われたとしたら、私も行動を起こすと思うし、それを多くの人に知ってほしいと思います。人間が起こしてしまう一つひとつの失敗を中和して、希望の色に変えてゆくにはとても大きな力が必要だという事実を教えてもらいました。」

プログラム2『黒い雨』

【来場者の声】

「小説の名前は前から知っていましたが、今回観ることができて本当に良かったです。素晴らしい映画でした。増田先生の貴重なお話も良かったです。」

「“気象”から考察するというのが新鮮でした。目に見えない放射能被害者の方々へ広島、長崎の被爆者の“被爆者手帳”のようなものを交付してもらいたいと思います。」

「原爆、黒い雨、被爆の関係、気象現象に現れた黒い雨の真の姿、参考文献、増田先生のご苦労などが十分に伝わりました。」

「放射能の晩発効果は話としては知っていましたが、この映画を見てその恐ろしさを痛感しました。福島原発事故の後だけに、一層身近に感じられました。出演している俳優も素晴らしい人たちばかりで、その熱演にも感動しました。」

【プログラム3】『24000年の方舟』

【プログラム4】『隠された被曝労働～日本の原発労働者～』

【来場者の声】

「樋口健二さんの話と映画、講演、素晴らしかった。もっと大々的にやるべき。」

「第2の福島が起きないようにするために、原発ゼロは実現できるのか。しなければの思いでいっぱい。3・11の事故で直ちに避難せよと云わずに、ぐずぐずしていた東電、政府、メディアのやり方は犯罪だと思う。」

「原発労働者の実態を暴いた樋口さんの写真に衝撃を受けました。こういう人たちの犠牲の上に日本の社会が成り立っていることを忘れてはいけません。」

「原発に関連する被ばく労働者の問題は、これまでに起きた公害問題と同じで、結局また同じ過ちを繰り返しているということがよくわかりました。問題だという認識を広め、真実を見極めていかなければならないと思いました。」

プログラム5『六ヶ所村ラブソディー』

【来場者の声】

「映像もとてもきれいで内容も素晴らしいと思います。反対派、賛成派両方が出てくるので公平だったと思います。工場の近くで既に汚染が始まっているという鎌仲さんのお話にはショックを受けました。」

「大変勉強になった。知らなかったことばかりでした。鎌仲監督は本当に良い仕事をしていて尊敬します。大きな転換の推進力になってください。」

「漸く観ることができました。地の塩のような活動を続けている庶民の姿にはホッとさせられるものがあります。作業に際して“防護”服の必要があるような産業が存在すること自体、許すべきではない。かほどに剣呑な“原発”は可能な限り安全な方法で安楽死に導くしか方途がないのではないか。」

「原発に関するジレンマを良く感じるすることができました。いま現在、私の地元には原発はありませんが、このような現状に陥らないためにはどうすればよいのかということを考えました。」

「昆布を採る人が『私たちは働いて、その日食べて、何も残さないで死ぬだけ。鳥と同じだ』と言っていたのが印象的だった。お金に使われない生活をしようと思った。」

プログラム6『棄てられたヒバク～証言・被災漁船50年目の真実～』

【来場者の声】

「マスコミで発表されない事実が分かった。たった一人でも追求していた写真家や行動している人たちに驚き、ご苦労に感動しました。色々な業界との大きな運動ができればと思います。」

「第五福竜丸の事件に出会ったのは小学生のときでした。3・1 ビキニデイに参加し、第五福竜丸展示館を何度か訪ねたりして関心は持ち続けてきましたが、そんな中“フクシマ”が起きてしまいました。考え続けていきたいです。」

「質の高いドキュメンタリーを見せていただきました。上映後のお話も凄かった。この大きな変化の中、何らかの形でかかわっていきたいと思います。」

「第五福竜丸ばかりが知られていますが、他に1000隻もの被曝があったことは知りませんでした。広島、長崎以外の被曝が歴史に埋もれてしまう懸念を禁じ得ません。改めて考えさせていただきました。」

「ビキニ水爆事件での被害者隠蔽をした日本、あの時代は…とは思えませんでした。今の日本の政治体質も何も変わっていないと思いました。変わらなくてはいけないと思いつつ、どのようにしたら良いのか分からないところが歯痒く感じています。世界は進化しているところもありますが、何も変わっていないところもあるのだと感じ、少し落胆しました。未来を背負う子どもたちに正義を教えたいです。」

「ビキニと言えば、第五福竜丸の問題しか知らなかった。他にこんな多くの船も同時に被曝していたにもかかわらず、記録に残されていないのは驚きでした。フクシマの件も含め、人間の良心が問われている時代だと思う。」

「自らの無知さを痛感させられました。伊東ディレクターには今後も貴重な調査を続けていただきたいと思います。」

【特別企画】シンポジウム「いま、フクシマは」

基調講演：「お金の世界から いのちの世界へ」菅野典雄（飯舘村長）

パネル・ディスカッション

- ・パネリスト：天野和彦（福島県生涯学習課社会教育主事）、菅野典雄（飯舘村長）、小林典子（福島中央テレビ報道部長）、酒井小百合（福島県郡山市立大島小学校教諭）
- ・モデレーター：藍原寛子（フリー・ジャーナリスト）

【来場者の声】

「『マイナスからゼロを目指す』『生産性のない活動を繰り返していかなければならない』という菅野村長の発言が非常に印象的でした。これからどのような被害が新たに生まれていくのか、また解決するのにどれほどの時間がかかるのか。原発を抱えている日本に住んでいる人間なら、主体的に問題に取り組まなければいけないと思います。」

「報道では伝わりにくい福島の実態について知ることができる大変充実した企画でした。特に、福島の子どもたちのおかれた状況について、色々と考えさせられました。」

「学者や評論家ではなく、福島で生活し働いている人たちがパネラーで良かった。マスメディアが伝えている福島からは見えてこない部分を知らせてもらった感じです。」

「現場からのパネリストだったので臨場感溢れるお話が多く、心打たれた。現地からのパネリストの皆さんが元気はつらつだったことに気持ちが救われました。」

「福島の現状を生の声で伺うことができ、大変有意義な機会でした。最後は“希望”の形で結んでくださり、光明に包まれた感じがしました。」

■活動の成果

今年度の映画祭では福島原発事故を受け、現地からパネリストを招いて「いま、フクシマは」と題するシンポジウムを同時開催し、大きな反響を得た。また、『黒い雨』や『原爆症認定集団訴訟の記録』といった、原爆被害をテーマとした作品にも数多くの来場者を迎えた。映画祭2日間の来場者数は約600名を数え、上映後に来場者からは、上記の「活動の実施経過」で紹介したように、映画祭への参加を通じて「改めて原爆被害に向き合うことが必要」といった意見や「原発と原爆の開発過程における密接な関係を初めて認識した」、「映画祭は広島、長崎における被爆体験を後世に伝える貴重な機会である」などの声が寄せられた。

今年度の映画祭では、特に核と原子力とのつながりを参加者に訴えるとともに、私たち自身の在り方の問題に向き合い、参加者同士の対話や意見交換の機会を提供することができた。

■今後の課題

今後は、映画祭という兎角一方的な機会提供となりがちな場を超えて、さらに来場者同士の意見交換や触れ合いが触発されるようなプログラムを企画し、鑑賞した市民が継続して核の問題に関心を持ち、自主的な取り組みができるような場を提供する映画祭としていきたい。そのためのひとつの取り組みとして、全国の学生や市民が自主的に制作するヒバク関連の映像作品を募集し、映画祭のプログラムに盛り込むための仕組み作りを検討している。また、本映画祭はこれまでの活動を通じて国際的な認知を得ており、海外の関連組織との連携も長期的な目標

として展望している。

以上の活動を実現するうえでの課題は、何よりも事務局体制の整備・強化にある。現在の事務局員は全員がボランティアであり、1年ごとに映画祭の開催を検討する状況にある。今後は、長期的な計画を立案・実施するために、明治大学の学生団体など、外部団体との連携を深めていく。